

公園墓地のさきがけ
開苑55周年

我が家族、
春秋苑に眠る。

小説家…1898年～1964年
尾崎士郎



故・尾崎士郎氏のご長男、尾崎依士氏。
絆を語る。春秋苑を語る。

父・尾崎士郎の永眠の地に春秋苑を選んだのは、母でした。
「戒律に縛られず自由でありたい」「明るい場所がいい」生前の父の言葉、
そのままに母が、思いを込めて形にしました。光溢れる多摩の広大な丘陵地に。
宗教にこだわらず自由に。江戸時代の俳諧師・去来の墓のように自然石をあしらひ、
こじんまりと。父の五十回忌を迎えた今も、墓参のたび、父と母の絆を感じます。

●尾崎士郎氏のプロフィール 愛知県出身。昭和8年「都新聞」に青春小説「人生劇場」を連載し、
大ヒット。流行作家となる。この他、「篝火」、「天皇機関説」などが代表作。
相撲好きで、横綱審議委員会を終生務めた。文化功労者（没後追贈）。

写真協力：尾崎依士氏ご遺族より提供

ご利用者の宗教・宗派を問いません

お問い合わせ資料のご請求は

0120-07-4100
<http://www.shunjuen.or.jp/>

小田急線生田駅
高級公園墓地

春秋苑

〒214-0036 神奈川県川崎市多摩区南生田8-1-1

讀賣新聞

広告特集

春秋苑
公園墓地のさきかけ
開苑55周年

我が家族、春秋苑に眠る。

故・尾崎士郎氏の墓所について、ご長男、尾崎俵士氏にインタビュー。

生前からの 不思議なご縁でした

父が初めて春秋苑を訪れたのは、六十歳を過ぎた頃だったと思います。故・本間雅晴陸軍中將のお墓の碑文を頼まれたんです。

そのご縁で、苑内に文学碑も建てることになりました。「青春」を語る父の文言は、墓苑に似つかわしくないかもしれません。しかし僕は「尾崎士郎らしい」と思っています。生涯、青春の誓

春秋苑に決めたのは 母でした

父の死後、母は「父が気に入っていたから」という理由で、迷わず春秋苑を選びました。「明るく、戒律に縛られない墓苑」が生前の父の望みでした。

父は幼い頃「悪いことをすると恐ろしいところへ行かされる」と地獄絵図を

いを信じ、最後まで生きることには懸命であった。そういう父でした。

見せられたそうです。そのせいか、大人になっても暗いところと宗教だけは苦手だったんです。

尾崎家は浄土宗ですが、戒名は、文士仲間て天台宗の僧侶でもあった故・今東光さんが付けてくださいました。宗派を超えた弔いは、いかにも父にふさわしいですね。

父の願いが すべて叶ったお墓です

生前、江戸時代の俳諧師・向井去来のお墓を見て心惹かれた父は、よく「あれがいい」と言っていたそうです。去来のような小さな自然石のお墓で、ひっそりと故人でいたい。そんな父の思いを母が貫き、建

築家の故・谷口吉郎さんに設計していただきました。

実は、父にはもう一つ憧れがありました。「仲



尾崎士郎氏文学碑(苑内)



尾崎士郎氏墓所(苑内)

間が同じ場所に一堂に集まる」西郷隆盛のお墓です。後年、児童文学者の故・坪田譲治さん御一家などご縁のあるお墓が苑内に次第に増え、父の二つの夢が春秋苑で叶いました。

両親の絆を 今も感じています

父は、何事も自分の思い通りにやる人でした。その一方で、体の弱い母をかばうような優しさのある人でした。父の死後、生前の願いに忠実に従う母を見て、二人の深い絆を感じました。

母は月に二度の墓参を欠かさず、晩年、寝たきりになっても「春秋苑に連れて行って」と言い続けていました。その母も、今は父と共に眠っています。

僕にとって春秋苑は、今も父と母の心に触れることができる場所です。父の五十回忌を迎え、両親の絆の証しである「尾崎士郎の墓」をずっと守っていきたくて改めて感じています。

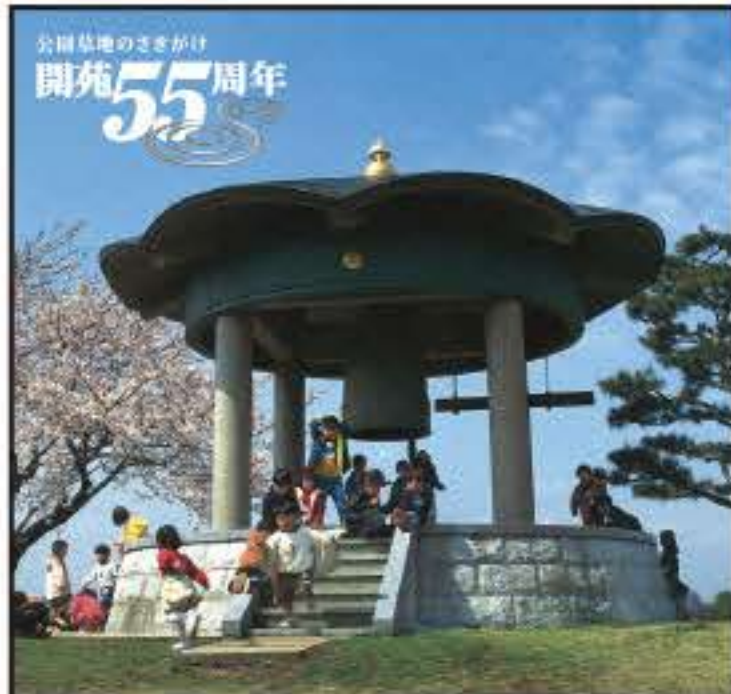


尾崎士郎

写真協力: 西海市教育委員会文化振興課

尾崎 士郎 (小説家: 1898~1964)

愛知県出身。昭和8年「都新聞」に青春小説「人生劇場」を連載し、大ヒット。流行作家となる。この他、「篝火」、「天皇機関説」などが代表作。相撲好きで、横綱審議委員会を終生務めた。文化功労者(没後追贈)。



公園墓地のさきかけ
開苑55周年

おかげさまで、開苑55周年。

お問い合わせ・資料のご請求は

ご利用者の
宗教・宗派を
問いません

小田急線生田駅

高級公園墓地

春秋苑

0120-07-4100

春秋苑ホームページ
<http://www.shunjuen.or.jp/>

〒214-0036 神奈川県川崎市多摩区南生田8-1-1